

# 価値共創理論から捉えた今後の公共空間マネジメント実践の課題と展望

笹尾 和宏 (京都大学 経営管理大学院, sasao.kazuhiro.24h@st.kyoto-u.ac.jp)

大庭 哲治 (京都大学 経営管理大学院, oba.tetsuharu.5n@kyoto-u.ac.jp)

Challenges and prospects for public space management revealed by value co-creation theories

Kazuhiro Sasao (Graduate School of Management, Kyoto University)

Tetsuharu Oba (Graduate School of Management, Kyoto University)

## 要約

公共空間における利用者行為の多様性を高めるためには、利用者個々の私的行為を拡張することが重要である。本研究の目的は、公共空間の利用促進における中心理論かつ手法であるプレイスメイキングをサービス科学領域において理論的枠組みを提供している価値共創理論と照合することによりプレイスメイキングの理論的課題を抽出し、利用者の公共空間に対する認識から私的行為の拡張性を高める公共空間マネジメント実践のあり方を展望することである。文献調査によりプレイスメイキングの理論体系と公共空間利用者の認識を分析し、本研究の成果として以下の2点を明らかにした。1点目に、サービス・ロジックの活用可能性を見出すことがプレイスメイキングの理論的課題であることを明らかにした。これは、現在のプレイスメイキングの理論体系はサービス・ドミナント・ロジックに通じているものの、プロバイダーと顧客との直接的相互作用を価値共創概念に持つサービス・ロジックとの関連性が見られなかったことによる。2点目に、利用者がそこで何が出来るかを直接的に明示しない無主性の高い公共空間マネジメントが、私的行為の拡張に貢献しうることを明らかにした。合わせて、闘争としてのサービスという考え方を取り入れることと、他利用者との直接的な相互作用に配慮することが、無主性の高い公共空間マネジメントに有用となる可能性が導かれた。

## キーワード

プレイスメイキング, 公共空間マネジメント, 価値共創, 無主性, 闘争としてのサービス

で禁止されているスケートボードやたき火などの行為が可能である旨が示され、利用者のニーズに寄り添った公共空間マネジメントが実施されている (栗本, 2020)。

## 1. はじめに

### 1.1 プレイスメイキングの台頭

近年、都市の再活性化において公共空間の再生と活用への期待が高まっている (野城他, 2022: 278)。その実現施策として、魅力ある公共空間の計画概念かつ手法であるプレイスメイキング (以下、PM とする) が重視されているが、PM における公共空間マネジメントではその対象は施設や設備などの空間のあり方に留まらずひとの行動にまで及んでいる。

### 1.2 公共空間における私的行為の拡張

国土交通省が掲げる「WEDO」は、これからのまちづくりの方向性を示すキーワードの頭文字を合わせたものであるが、空間に言及した Walkable、Eye level、Open に加え、Diversity が挙げられており、魅力ある公共空間を実現する上で利用者行為の多様化が重要視されていることが伺える (国土交通省, 2019)。

公共空間における利用者行為の多様性を高めるには、マネジメントを通じて利用者の私的行為を拡張することが重要である。近年、禁止標示等によって私的行為を制限するマネジメントを批判する動きから、東京都足立区や豊島区の街区公園や愛知県豊田市の駅前広場などで、私的行為を拡張するマネジメントが見られるようになっている。愛知県豊田市の駅前広場では、多くの駅前広場

### 1.3 サービス科学における価値共創理論の視座

こうした公共空間マネジメントでは管理者のみならず利用者の行為を経てその価値が生じるが、サービス科学における価値共創理論の援用により、新たな知見が得られる可能性がある。価値共創ではサービスプロバイダー (以下、プロバイダーとする) と受益者である顧客との相互行為により価値が生まれるとされるが、この関係を公共空間の管理者とその受益者である利用者を読み替えることによって、価値共創理論の視点から公共空間マネジメントのあり方を捉え直すことができるようになるためである。

### 1.4 公共空間利用における闘争性

多くの公共空間マネジメントでは、禁止看板が設けられ管理者が不審行為を監視しているが、利用者はそれらを前に緊張を強いられ自らを否定されているように感じている。これは、山内が論じた顧客がプロバイダーから感じる緊張関係と同義である (山内, 2015)。例えば、寿司屋でメニューがないことや板前の不躰な態度は不親切な営業形態であり、顧客の店に対する理解を妨げる。顧客はそうしたプロバイダーからの否定を通じて、顧客として相応しいかを試され緊張を感じるが、その相応性を実際の振る舞いによって証明する。これにより、顧客にとって店の利用における価値が生じていると山内は論じ

ている。

ここでは、顧客のニーズを察したプロバイダーがそれに見合うサービスを提供することによって顧客が満足を得ているのではない。顧客はプロバイダーの否定的な要求に対応できることを示すことによって満足を得ている。山内は、プロバイダーからの否定に伴う緊張状況をもたらされた顧客が、その克服のために自身の能力を発揮する証明・承認プロセスに闘争性を見出し、闘争性の観点でサービスを捉え直すことによって価値共創の新たな構造が浮かび上がることを明らかにした。

公共空間における利用者行為を闘争性の観点から捉え直すことは、公共空間マネジメントのあり方をひも解くひとつの鍵になりうると言える。

## 2. 研究の目的と方法

### 2.1 研究の目的

本研究では公共空間の利用促進における中心的な理論かつ手法であるPMと価値共創理論との照合によりPMの理論的課題を抽出し、利用者の公共空間に対する認識の分析から私的行為の拡張性を高める公共空間マネジメント実践のあり方を展望することを目的とする。

公共空間では、管理者は必ずしも価値共創を念頭に公共空間マネジメントにあたっているわけではない。そこで、利用者が公共空間をどう捉えているかを明らかにすることにより、私的行為の拡張性を高める上でどのような公共空間マネジメントが有効なのかの立案を試みる。その際、利用者の緊張が公共空間マネジメントにどう活かせるのか、闘争性の観点を含めて論述する。なお、本研究で準用する理論的枠組みは、PM及び価値共創となる。

本研究では管理者の事前の許可・了承を必要としない行為を私的行為と位置づけ単独であるかどうかは問わないこととして取り扱う。また、その場所で行うことが利用者本人にとって不慣れに感じられるとき、その行為が拡張的であると位置づけた。利用者にとって不慣れに感じる行為でありながらもやってみようと思えることは、当該公共空間の利用形態の多様化に貢献しうると言える。

### 2.2 研究の方法

本研究は文献調査によって行う。PMの理論体系については実施団体の書籍及びブックレット等より該当箇所を抜粋・整理する。利用者の認識についてはパルクールをケーススタディとし学術書から利用者のコメントを抽出しテーマティック・アナリシス法（以下、TA法とする）を用いて分析する。

### 2.3 既往研究

公共空間マネジメントの枠組みを扱ったものとしては、公共空間マネジメントの活動場所と活動内容を明らかにしたもの（杉田・土居, 2012）や公共空間マネジメントを軸に都市再生推進法人の組織運営上の課題を明らかにしたもの（伊藤他, 2016）など多数見られるが、サービス科学領域との関連性に着目したものは見られない。

PMの視座に立った研究としては、稼働椅子の効果を調査したもの（三友・渡, 2010）、テーブル設置による滞留効果の経時変化を追ったもの（遠矢他, 2019）、イベント時の滞留状況を明らかにしたもの（三友, 2013）など多くの蓄積がある。利用形態の多様性を高めるマネジメントのあり方について論じている研究としては、利用者行為の多様性に着目し、特定利用形態に対する目撃者の寛容性を高める方策について明らかにした研究がある（笹尾・大庭, 2022）。以上、PMを扱う研究には多くの蓄積があるが、これらにおいては、価値共創への言及は見られない。PMにおける市民参加に力点を置いた価値共創について論じた研究は見受けられるものの、サービス科学における価値共創理論との関連性に関する言及はみられない（Teder, 2019）。

これらの状況を踏まえ、本研究では、サービス科学における価値共創理論との対応性に着目し、検証する。その上で、PMの理論的課題を導出し、公共空間マネジメントの実践に活かすことができる新たな知見の獲得に成功しており、この点が本研究の特徴である。

## 3. 価値共創理論の概要

本章でPMと価値共創理論を照合するにあたり、価値共創理論であるサービス・ドミナント・ロジック（以下、S-Dロジックとする）及びサービス・ロジック（以下、Sロジックとする）について整理する。

上述の各理論は多くの既往研究で言及されているところであるが、S-Dロジック、Sロジックともに顧客が価値の決定に関わるという前提に立っている。

価値共創理論は、予めグッズに備わった価値が交換行為によって顧客に与えられるというグッズ・ドミナント・ロジックを批判する形で生まれた。グッズの交換行為をサービスの概念から捉え直そうとするのがS-Dロジック、グッズの交換行為の中にサービスの概念を見出そうとするのがSロジックであり、それぞれ表1のように整理される（大藪, 2019）。

受益者（PMにおける利用者であり価値共創理論における顧客）の関与という視点に立てば、S-Dロジックが財（グッズ・サービス）の計画・生産段階からの顧客の関与のあり方を対象とした理論であるのに対し、Sロジックは顧客との直接的相互作用が生じる場を対象とした理論である。プロバイダーの一連の活動プロセスを含めてマクロ・包括的に価値共創を捉えるのか、財を消費する瞬間の活動を価値共創と捉えるのかの違い、と言える。村松はこの点についてS-Dロジックでは生産が消費に先立っており、Sロジックでは生産と消費に同時性があると捉えている（村松, 2016）。

## 4. 価値共創視点でのPMの概要

PMは実施主体によって様々な手法が用いられ応用的に実践されているが、本稿では価値共創理論との照合を図るという視点に立ち、個別の実践のあり方ではなく確立されているPMの理論体系を対象とする。

表 1 : S-D ロジックと S ロジック

	S-D ロジック	S ロジック
提唱者	Vargo and Lusch (2004)	Grönroos (2006)
顧客の立ち位置	価値創造のアクターとして、 価値創造プロセスに内在	
価値創造の担い手	プロバイダーによって事前に決められるのではなく、顧客の 使用段階で決定される	
価値創造におけるサービスのあり方	支配的	支配的ではない
価値創造プロセス	多様なアクターからなるネット トワークによる	プロバイダーと顧客との
価値共創概念	多様なアクター間のリソース 統合	プロバイダーと顧客間の直接 的相互作用
価値の位置づけ	文脈価値	使用価値
価値共創の視座	マクロ・包括的	ミクロ・マネジリアル的

注：大藪（2019）をもとに著者が編集。

まず、概要として PM の定義と実現すべき空間特性について整理し、価値共創理論との親和性を確認する。次に、PM の取り組み概要を把握すべく原則とプロセス、及び評価項目について整理し、S-D ロジック及び S ロジックとの関連性を明らかにする。

#### 4.1 PM の定義と実現すべき空間特性

##### 4.1.1 PM の定義

PM は、ニューヨークで地域再生に取り組む非営利団体 Project for Public Spaces（以下、PPS とする）が 1990 年代に提唱し始めた単語である（Project for Public Spaces, n.d.）。PPS は、PM を「公共空間とその使い手との関係性を強化し、共有価値を最大化する公共空間形成のための協働プロセス」と定義している（Project for Public Spaces, 2022）。

他にも PM は実践する活動主体によってさまざまに定義されているが、総じて、利用者の参加を軸とした公共空間づくりによって地域が再生されるという考え方が PM の根底にある。三友の総括によれば「個人の精神的な拠り所となる場をその人自身が住んでいる地域や愛着を持つ地域に創出・再生すること」と定義され、先の PPS の定義にも通じている（三友, 2015）。

##### 4.1.2 PM で実現すべき空間特性

PM で実現すべき空間特性として、表 2 では全 32 項目の要素が“ACCESS&LINKAGES”、“CONFORT&IMAGE”、“USES&ACTIVITIES”、“SOCIABILITY”の分類ごとに配されている（Project for Public Spaces, 2022）。これらは、対象とする公共空間に身を置くことでそれが感じられるかどうか、という利用者の視点をもって設定されている。

##### 4.1.3 まとめ

PM は、その受益者である利用者の参加を前提としている点、また、実現すべき空間特性は利用者が現地を訪れ経験して判断される項目である点から、価値共創との親和性が高い理論であると言える。

次節では、PM の原則とプロセス及び評価項目を整理し、価値共創における各理論との整合性について検証する。

#### 4.2 PM の原則とプロセス、評価項目

##### 4.2.1 PM の原則

PM を進める上で重要となる原則は表 3 に示すとおりである（Project for Public Spaces, 2022）。このうち、1、2、5、6、7、8 の原則で利用者の関与について言及しているが、これらは計画段階やプロセス全般にわたる原則であると言える。

表 2 : PM で着目すべき空間特性

特性	ACCESS & LINKAGES	COMFORT & IMAGE	USES & ACTIVITIES	SOCIABILITY
	CONTINUITY	SAFE	FUN ACTIVE	DIVERSE
	PROXIMITY	CLEAN	VITAL	STEWARDSHIP
	CONNECTED	GREEN	SPECIAL	COOPERATIVE
	READABLE	WALKABLE	REAL	NEIGHBORLY
定性的要素	WALKABLE	SITTABLE	USEFUL	PRIDE
	CONVENIENT	SPIRITUAL	INDIGENOUS	FRIENDLY
	ACCESSIBLE	CHARMING	CELEBRATORY	INTERACTIVE
		ATTRACTIVE	SUSTAINABLE	WELCOMING
		HISTORIC		

注：Project for Public Spaces（2022）をもとに著者が編集。

表 3：PM の原則

項目	内容	利用者の関与
1. The Community is the Expert	コミュニティの関与を促進する	言及有り
2. Create a Place, Not a Design	場をつくることを意識する	言及有り
3. Look for Partners	取組パートナーを見つける	言及無し
4. They Always Say “It Can't Be Done”	否定的意見にとらわれない	言及無し
5. Have a Vision	ビジョンは住民や働き手とつくる	言及有り
6. You Can See a Lot Just By Observing	現地を観察することで理解する	言及有り
7. Form Supports Function	将来像に導くための形を見出す	言及有り
8. Triangulate	活動を生む仕掛けを効果的に置く	言及有り
9. Experiment: Lighter, Quicker, Cheaper	素早く実験して制度を高めていく	言及無し
10. Money Is Not the Issue	かかるコストだけで評価しない	言及無し
11. You Are Never Finished	改善を前提とした管理運営を行う	言及無し

注：Project for Public Spaces (2022) をもとに著者が編集。「内容」については著者が「項目」の説明文を把握し要約。

この点において、PM の原則では、S-D ロジックの観点を多く含んでいると言える。

なプロセスを示している点で、S-D ロジックに近い視座に立ったものであると言える。

#### 4.2.2 PM のプロセス

前節の原則に基づいた PM のプロセスを示しているのが図 1 である (Project for Public Spaces, 2022)。まず、① “Define Place and Identify Stakeholders” では、ステークホルダーを把握するとともに官民の各主体とのパートナーシップを構築する。次に、② “Evaluate Space and Identify Issues” では、対象地現地で観察し、優れている点と要改善点を抽出し、現況空間を評価する。③ “Place Vision” では、ビジョンづくりとして、利用方法と活動の種類に配慮しながら空間レイアウトを検討する。④ “Short Term Experiments and Management” では、「気軽に / 迅速に / 安価に」を意識した短期間の実験を実施する。⑤ “Ongoing Reevaluation and Long Term Improvements” では、評価活動を継続的に行い、長期スパンで捉えた改善案を構築する。

図中に逆向きの矢印が 2 つ描かれているが、ひとつは④短期実験で得られた成果をフィードバックし、Place Vision の修正に戻ることを、もうひとつは長期スパンでの改善の実装に先駆けて、短期実験を繰り返すことを意図している。

PM のプロセスは計画から利用まで、換言すれば価値共創理論における生産から消費までを含むマクロ・包括的

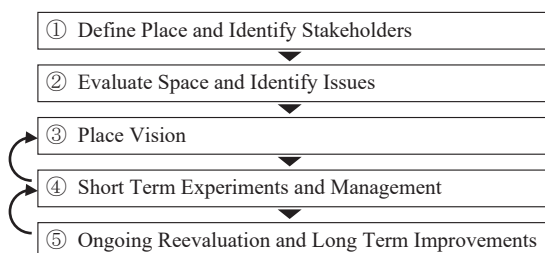


図 1：PM のプロセス

注：Project for Public Spaces (2022) をもとに著者が編集。

#### 4.2.3 PM の評価項目

PM を通じて達成されるべき公共空間の評価項目に関しては、三友による研究の蓄積がある (三友, 2015)。ここでは、三友と同様に PPS が作成に関わった文献資料 (U.S. General Services Administration and Project for Public Spaces, 2007) を参照し、マネジメントに関する評価項目について、表 4 で整理した。

1 から 10 はそれぞれ評価対象となる公共空間の状況を示しており、いずれも利用者目線での公共空間の使いやすさや魅力に言及したものであった。直接的に管理行為を指し示したものが 5 項目 (1、2、5、7、9、10)、利用者行動・意識、空間の状態といった間接的に管理行為を指し示したものが 5 項目 (3、4、6、8) であった。これらは、PM のプロセス全般を包括した成果として表出する状況項目と解釈することは可能ではあるが、一方で、いずれも管理者と利用者との直接的相互作用には言及していなかった。

#### 4.2.4 まとめ

PM の原則からは、PM には S-D ロジックの観点が多く含まれていることが明らかになった。PM のプロセスは S-D ロジックの視座にたっていることが導かれた。PM を通じた公共空間の評価項目はいずれも利用者目線に立ったものであるが、PM のプロセス全般を包括した成果と解釈できる点で S-D ロジックとの関連性が強く、一方で S ロジックの価値共創概念である直接的相互作用に言及した項目は見受けられなかった。

#### 4.3 PM の理論的課題

以上、PM は価値共創理論と親和性の高い理論であることを明らかにした。合わせて、現時点において PM で確立されている理論体系は、S-D ロジックの着想に通じてい

表 4：マネジメントに関する評価項目

項目	内容	
1	Management takes responsibility for the well-being and safety of tenants and visitors once they enter the site	利用者の快適性や安全に対し責任を負っている
2	Management provides a welcoming presence outside the building	その場所のウェルカムな雰囲気を出している
3	People meet friends or take visitors to this plaza	同伴や待ち合わせなど複数単位での利用者が見られる
4	The plaza is viewed as a destination, not only as a pass-through	その場所が何らかの目的地として機能している
5	Client agencies sometimes hold events in the exterior public spaces	主催イベント（代行）を実施することがある
6	Outside groups sometimes hold events in the exterior public spaces	外部主体のイベントが実施されることがある
7	Outdoor public spaces are clean and free of litter	清潔でゴミが落ちていない
8	Visitors or tenants will pick up litter when they see it	来訪者やテナントがゴミを拾う状況が生まれている
9	Plantings and flower beds are changed seasonally and are well-maintained	植栽は季節毎に植え替えられ管理が行き届いている
10	Outdoor public spaces are in good repair	修繕対応がしっかりと維持できている

注：U.S. General Services Administration and Project for Public Spaces (2007) をもとに著者が編集。

ると解釈される。前述の「新とよパーク」は従前はできなかったスケートボードやたき火が2019年以降申請手続き等不要でできるようになり私的行為の拡張性が高められたPMの事例である。どのようなことができる広場にするかを検討する取り組みの初期段階から地域住民や将来の潜在的利用者（スケーター）が包括的に参画しており、PMのプロセスの中でS-Dロジックに該当する価値共創が起り広場における私的行為が拡張性されたと言える（園田, 2019: 167-229）。

一方でSロジックの観点で確立されている理論は見られなかったため、PMへのSロジックの活用可能性を見出すことがPMの理論的課題であるといえる。次章では直接的相互作用による価値共創の視点から、「私的行為の拡張性を高める」ための公共空間マネジメントのあり方の示唆を得るべく、文献調査及び分析を行う。利用者の視点に立ち、利用者が拡張的な私的行為を実践する際に公共空間において何を意識しているのかを分析することにより、拡張的な私的行為が公共空間に表出する上でどのような公共空間マネジメントが有効なのかを浮かび上がらせることを試みる。

## 5. 公共空間マネジメントに対する利用者の認識

本章では、利用者が公共空間において何を意識しているのかに着目し、拡張的な私的行為の実践においてどのような直接的相互作用が生じているかを明らかにする。拡張的な私的行為としてパルクールをケーススタディとして取り上げる。

### 5.1 パルクールの概要と調査対象としての適性

#### 5.1.1 パルクールの概要

パルクールは1990年代にダヴィッド・ベルとセバスチャン・フーカンにより考案されたもので、仏国を起源とする。建築物や土木構造物などを越えるべき障害物と見立てて、整備された歩行者空間ではなく通行を想定されていない

空間を自身の身体能力のみで移動する活動である。2001年公開の映画「YAMAKASHI」が認知を高め、以降世界各国で取り込まれるようになった（平石, 2022）。2024年パリ五輪の正式種目の候補に残るなどスポーツ競技としての評価も高まっており、パルクールの専用パークが整備される事例も見られるようになっている。

パルクールの実践者はトレイサーと呼ばれる。普段、トレイサーはトレーニングと称してその技術を高める為に広場などの公共空間にグループで集まってマヌーバと呼ばれる身体を駆使した移動技術を練習している。

#### 5.1.2 調査対象としての適性

本研究は、私的行為の拡張性を高める公共空間マネジメント実践のあり方の展望を目的としている。この観点に立てば、本章のケーススタディとしてはランニングや休憩など公共空間でよく見られたり市民がよく実践していたりする代表性の高い行為よりも、公共空間においても目にする機会が少なく市民にとって身近ではない行為が適している。そこでストリートカルチャーに着目し、中でもパルクールをケーススタディとして選択した。本項ではパルクールが拡張的な私的行為のケーススタディに適していることをその特性を整理することを通じて確認する。

トレイサーはパルクールにおいて空間全体やその施設や設備を本来の用途とは違う目的で用いている。また、安定的に同じ場所でトレーニングを続けることが簡単ではなく、他者から注意を受けないか不安を抱えている（一般社団法人日本パルクール協会, 2018）。これらの点より、トレイサーはパルクールの実践においてその場所を不慣れに感じる傾向にあり、拡張性の高い私的行為であると言える。

パルクールはストリートカルチャーに類される。ストリートカルチャーは管理者が想定していない公共空間の利用形態であるという点で私的行為としては空間の利用

形態の多様性を高めていると言える。

なお、ストリートカルチャーであるグラフィティやスケートボード（住田，2022）は歴史も古く社会的認知度も高いが、管理者にとってグラフィティはヴァンダリズムでありスケートボードは他者との接触・施設棄損リスクを伴うため、多くの公共空間で予め禁止されており、価値共創が生まれにくい。

一方で、パルクールは実践者数としては増加傾向にあるものの社会的な認知度はグラフィティやスケートボードほど高くなく、それらのように予め禁止されているわけではない。目新しいものとして他の公共空間の利用者の目を引く一方で、時として危険行為とみなされたり警察や警備員に制止されたりする側面をも持ち合わせており、居合わせた管理者の裁量に制止の判断が委ねられている点で、直接的相互作用を通じた価値共創の余地が残されており、他の拡張的な私的行為への応用性が高い。

以上、拡張性の高い私的行為である点、他の私的行為への応用性が高い点をもって、パルクールは本研究のケーススタディとして適切であると判断される。

## 5.2 対象とする文献と分析手法

### 5.2.1 対象とする文献

本調査ではシカゴ派の社会学者ジェフリー・キダーの著書「パルクールと都市—トレイサーのエスノグラフィ—（原著 *Parkour and the City: Risk, Masculinity, and Meaning in a Postmodern Sport*）」におけるトレイサーのコメントを調査対象とする（キダー，2022）。パルクール実践の実態を数年にわたる複数のトレイサーへのエスノグラフィによって明らかにしたパルクール研究の数少ない学術書であり、取り上げられている話題に網羅性がある点、トレイサーのコメントには一定の代表性があるとみなすことができる点をもって、本書を用いる適切性を評価した。

なお、各話題に対して全トレイサーのコメントが同列的に示されているわけではないため、本分析は調査目的に対して概観を掴み仮説を立案する上で有用であると言える。

本書の目次は表5のとおりである。パルクールの概要について言及した序章、その歴史やスポーツとしての発展に言及した第1章、トレイサーの身体的な技術に言及した第2章、トレイサーのコミュニティや心理的内面性

表5：パルクールと都市—トレイサーのエスノグラフィの構成

章番号	章題
序章	パルクールを社会的に考察する
第1章	鍛錬の文化を発展させ、スポーツを想像する
第2章	可能性の新しいブリズム
第3章	都市の若者たち
第4章	賭けのリスクを分散する
終章	都市を自分のものに転用する

注：キダー（2022）をもとに著者が編集。

に言及した第4章は調査対象から除外し、本稿の目的に適う第3章及び終章を調査対象とした。

### 5.2.2 分析手法

本分析ではテーマティック・アナリシス法を用いた。複数インタビューに対するインタビューガイドを用いたデータ収集ではなく、文献テキストからのデータ収集である点を鑑み、汎用性の高い手法を用いることが適切である点に依拠している。

## 5.3 分析結果

コメント一文ごとのコーディングとし、145のコーディングユニットを抽出した。それらにコードを付し、統合を行い最終的に表6に示すテーマとサブカテゴリに整理した。以下にテーマごとの説明を示す。なお、本節における文中の「」はトレイサーのコメントの抜粋を示している。

### 5.3.1 できそうにないことを実現するという本質性

「忍者やスーパーヒーローになって遊んでいた」「それが俺たちの遊びになったんだ」というヒーロー遊びがパルクールのきっかけであったことを示すコメントがあった。パルクールは、トレイサーの想像の中にあったヒーローにしかできない動き・所作の体現であると言える。また、マヌーバを「怖い」と表現しているコメントもあった。これらから「できそうにないことを実現する」ことがパルクールの本質であり、そのために反復練習などのトレーニングに真面目に取り組んでいる。

### 5.3.2 パルクールの実践的な魅力

パルクールの実践的な魅力は直接的に自己の中から内発的に見出すものと他者との関係性から対比的に見出すものがある。前者は習熟することによって得られる特別な体験について語られていた。後者は干渉を受けずに自分本位で取り組めることや他人との差異化を通じた自己の唯一性を感じられることなど他者を通じた自分のあり方について語られていた。

### 5.3.3 男性性の意識

男性トレイサーは女性を意識する傾向にある。一つの側面は気遣いでありもう一つは軽蔑である。また、男性トレイサーに対して「女々しいことはするなよ」「男になれよ」と声をかけている点から、無意識に性差に依拠した言動が見られることが推察される。

### 5.3.4 察知能力の獲得と無意識での発揮

パルクールのトレーニングでは空間全体やその中の施設や設備が本来の用途とは違う目的に用いられるが、日常生活においてもトレーニングの機会を見出し実践的に練習している。それにより、パルクールに転用できるかどうかの察知能力が備わり、無意識に発揮されている。トレイサーは、それを一般の人には備わらない特別な能

表 6：テーマとサブカテゴリ

テーマ	サブカテゴリ
できそうにないことを実践するという本質性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ パルクールのきっかけ</li> <li>・ 想像の動きの体現</li> <li>・ マヌーバへの恐怖</li> <li>・ トレーニングへの真面目な姿勢</li> </ul>
パルクールの実践的な魅力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 内発的なもの</li> <li>・ 他者との関係性に基づくもの</li> </ul>
男性性の意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 女性への友好性</li> <li>・ 女性の軽視</li> <li>・ 男性的振る舞い</li> </ul>
察知能力の獲得と無意識での発揮	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 空間に対する察知能力</li> <li>・ 施設・設備に対する察知能力</li> <li>・ 日常生活でのトレーニング機会の発見</li> <li>・ 一般人との能力差</li> </ul>
トレーサー同士のコミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 初心者への友好性</li> <li>・ 応援的な励まし</li> <li>・ 挑発的な励まし</li> </ul>
傍観者の反応への対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 傍観者に受け入れられたい思い</li> <li>・ 傍観者の反応に対する期待と満足</li> <li>・ 観衆を意識したマヌーバ</li> </ul>
管理者への対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 禁止されたくない思い</li> <li>・ 管理者に反発すべきではないという姿勢</li> <li>・ 管理者の現場対応の解釈</li> <li>・ パルクールに対する管理者の心象の推察</li> </ul>
見せようとするに対する観念	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 見せようとする事の肯定意識</li> <li>・ 見せようとするトレーサーへの疑義</li> <li>・ 見せることに対する後ろめたさ</li> <li>・ 見せたい衝動に抗えない心境</li> <li>・ あからさまには見せようとしなない態度</li> <li>・ 見た人の反応への自身の感情の従属</li> </ul>

力として自覚している。

### 5.3.5 トレーサー同士のコミュニケーション

男性性の意識に基づく女性への態度と同様の傾向がトレーサー同士にも確認される。ひとつは初心者に対する応援である。他には、身体能力が同程度のトレーサー間での励ましがあるが、応援的なものだけでなく挑発的な消しかけ合いも含まれる。「できないだろう？」という声掛けや先に成功されプレッシャーをかけられるというものであった。

### 5.3.6 傍観者の反応への対応

パルクールは独特の空間の利用形態であるため、トレーサーは傍観者に受け入れられたいと考え、トレーニングでは真面目さが伝わるよう細心の注意が払われている。その上で、マヌーバの成功を通じて、傍観者が観衆の反応を見せるため、トレーサーも傍観者を観衆として意識し反応を期待するようになる。観衆の好意的な反応に対しては満足感が生じ、否定的な反応に対しては不満が生じる。更にそうした対観衆意識は、遠くからでも目を引くマヌーバを見せつけるというかたちで、観衆への自己顕示となる。

### 5.3.7 管理者への対応

本書では管理者として主に警察とのやり取りについて

言及していたが、トレーサーは管理者と衝突することによりパルクールができなくなる事態を何よりも避けたいと考えている。「パルクールのイメージを良く」することを重視し、管理者から制止があった場合には反発すべきではないと考えている。トレーサー自身が「その場から離れれば、状況は収まる」と考え、管理者が立ち去った後にはトレーニングを再開するという対応を取っていることから、あくまでトレーサーが制止行為に従う目的は管理者との関係性を悪化させないためであることが伺える。

「警察が車で通りかかって立ち止まって、ショーを楽しんでくれたこともある」と発言しており、管理者はその立場上トレーニングを制止しなければならない状況に置かれているが、実際はトレーニングには問題性がないことを理解していることもある。トレーサーは管理者の制止行為を「好きでやっているわけではなく、「嫌なことなんだろうな」と解釈している。

このような制止・受容に対応しながらトレーサーは管理者に対する信頼関係を構築しようとしている。

### 5.3.8 見せようとするに対する観念

マヌーバを傍観者に見せようとすることを純粋に楽しんでいるトレーサーのコメントがある一方で、本来のパルクールの理念に反するとして見せようとするをよくないと評価しているトレーサーもいる。

ただ、そのような意識を持ったトレーサー自身でさえも見せようとしていないかというそうではない。「誰かのためにやっているのではないと自分を納得させようとするけど、誰もが少なくともちょっとはそうやっていると思っているよ」という後ろめたさが潜在している。「ああ、これやるのは気が進まない。体も（それはするなって）言ってる。でも、誰かに見られているんだから、いいところを見せないと！」で、ボンってやって、怪我とあるように、失敗する可能性を自覚していても抗えない衝動であることが伺える。

また、他のトレーサーに気づかれると良い評価をされないこともあり、マヌーバを見せようとあからさまに振る舞うことははばかれるが、「観衆が集まるのはただの偶然だよ」というコメントからもわかるように、トレーサーは自身のマヌーバが見られてしまう状況を望んでいる。

この時、トレーサーの満足感は観衆の反応に従属している。パルクールの実践的な魅力として整理したものは別の魅力が、実際のトレーニングの現場では起こりがちであることが読み取れる。

### 5.4 考察

次に、利用者の公共空間の認識を抽出すべく、上述の8テーマ間の関係性に目を向け考察を行う。なお、テーマ間の関係性は図2のように整理できる。

#### 5.4.1 アナロジー的想像力の習得

これは「できそうにないことを実現するという本質性」「想像力の獲得と無意識での発揮」の関係性から導かれる(図2の①)。上達するための真面目なトレーニングには反復練習が含まれている。反復練習を続けるには常日頃からの練習機会を見つけることが重要であり、習慣化されている。結果、一般の市民に対する場所への察知能力の高さに繋がっており、アナロジー的な想像力が習得さ

れていることが示されている。

#### 5.4.2 身体能力の差による男性性

これは「できそうにないことを実現するという本質性」「パルクールの実践的な魅力」「男性性の意識」の関係性から導かれる(図2の②)。パルクールの「できそうもないことを実現するという本質性」にとって最も重要なことは「真面目に練習する」ことである。それは安全性を高めることに他ならないが、これまで個人の想像でしかなかった行為を身体能力の向上によって現実に実現できるようになることでもある。これにより、自己実現的な自己効力感が得られると同時に自己の唯一性による他人との差異化という承認欲求も満たされる。このことは自分よりも実力・身体能力が劣っている初心者や女性に対する気遣い、或いは軽視という「男性性の意識」に反映される。身体能力の差によってパフォーマンスの質に差が生まれるパルクールの特徴の表れであるといえる。

#### 5.4.3 トレーサー間の相互評価の意識

これは「男性性の意識」「トレーサー同士のコミュニケーション」の関係性から導かれる(図2の③)。他者との身体能力差に対する意識は「トレーサー同士のコミュニケーション」でも生じており、応援や挑発がお互いに怖さを克服して実技に踏み切ることを後押ししている。トレーサーは他のトレーサーにどう評価されるかを非常に気にしていることが伺える。

#### 5.4.4 見せようとしていないという装い

これは「できそうにないことを実現するという本質性」「トレーサー同士のコミュニケーション」「傍観者の反応への対応」「見せようとするに対する観念」の関係性から導かれる(図2の④)。公共空間は真面目に練習すべき場所であるが、観衆からの好意的な反応を受けてしまうと、自分にしかできない目を引く行為を見せつけて賞

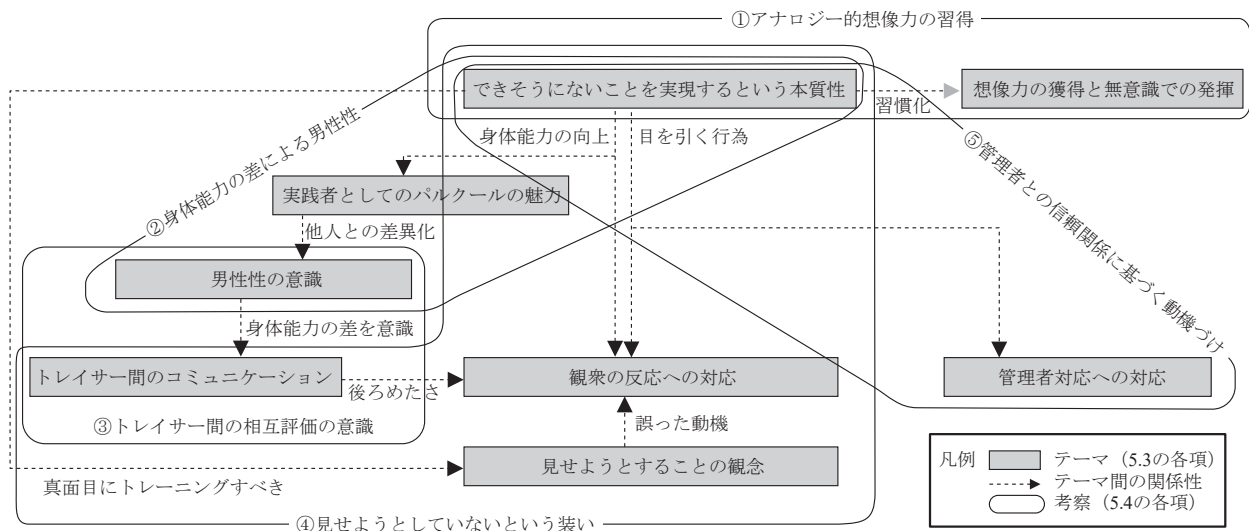


図2：テーマ間の関係



賛を受けようとするようになるというトレーニングと賞賛の因果関係の逆転が生じうる。ここには、鍛錬の姿勢を通じて傍観者に受け入れられたいという社会的欲求を満たそうとしつつも、傍観者を観衆と見立てて自らの身体能力を示して賞賛を受けようとする承認欲求が現れている。

一方で、それが誤った動機であり他のトレーナーに対して後ろめたく感じているため、あからさまに観客に見せようとはせず、あくまでトレーニングの様子がたまたま目撃されたことを装う傾向にある。

#### 5.4.5 管理者との信頼関係に基づく動機付け

これは「できそうにないことを実現するという本質性」「管理者への対応」の関係性から導かれる（図2の⑤）。公共空間が本来の用途とは違う目的で用いられ目をつくため、管理者から制止されることはあるものの、実際に対応している管理者本人の本意ではないと理解しており、敵対しているわけではない。その信頼関係を信じられるからこそ当該公共空間でのトレーニングの継続動機に繋がっていると言える。

### 6. 公共空間マネジメント実践の展望

前章では、パルクルに関する文献調査を通じて、拡張的な私的行為における利用者の公共空間の認識に関する知見を得た。

本章では、PMの理論体系からは導かれなかったSロジックの根源的概念である直接的相互作用の視点で、前章の考察内容を基点に私的行為の拡張性を高めるための公共空間マネジメント実践を展望する。その際、闘争の視点を考慮にいれて利用者にどのような緊張とその克服が起こりうるのか、についても合わせて論述する。

#### 6.1 アナロジー志向の空間づくり

利用者自らが空間全体や施設・設備を見て自身のやりたいことに活用できるか察知することができれば、その察知に応じた私的行為が実践される。公共空間マネジメントにおいては、汎用性の高い空間・施設・設備とすることやそれらの使い方を強要しないことが求められる。

空間・施設・設備を別なものに見立てて新たな使い方自身でやりたいことを実現するプロセスは、もともと管理者から与えられている用途とは異なる方法でその空間・施設・設備をうまく使いこなすことができたという承認を得ることと同義であり、闘争性の考え方で説明することができる。

#### 6.2 さりげなく見られてしまうような視認性の確保

拡張的な私的行為を他の利用者に見せることはその行為者の目的ではないが、その一方で行為者は他の利用者に見られてしまい賞賛されることを潜在的に求めている。そのため、利用者同士の「見る・見られる」の関係性が生まれやすい空間づくりを行うことが肝要である。ここで重要なのは舞台のようなお喋りの見せる場を用意

することではなく、他の利用者にあたかもさりげなく見られてしまうことを装える視認性を備えた何気ない場を用意することである。

闘争性の視点で捉え直すと、ここで行為者が承認を得たいのは他の利用者である。他の利用者はプロバイダーではないし利用者との価値共創を意図していない。とはいえ、行為者にとっては他利用者に対して緊張感を抱いており、当該行為を通じて他の利用者を受け入れられ好意的に受け止められたいと思っている。こうした証明・承認プロセスの結果として当該行為による行為者の満足度が高まっていると言える。この点において、行為者と他の利用者との間に闘争性の関係を見出すことができる。これは、お喋りの場ではなく何気ない場で起こりうる、他利用者との直接的相互作用による価値共創である。

#### 6.3 制止判断基準の利用者への共有

拡張的な私的行為を実践するにあたっては、利用者が管理者に対して信頼関係を抱いていること、言い換えれば行為を制止する際に管理者の考えを推し量れることが重要である。どのような行為であれば制止されるのかの判断基準を利用者があらかじめ心得ておくことで、根拠をもって私的行為の拡張に臨めるということが言える。

闘争性の視点で捉えると、判断基準を頼りに私的行為の拡張に挑むことになるため、利用者には判断基準の解釈に誤りがないかが試されているという管理者との緊張関係が生じる。無事に制止されずに実践できたということは、管理者の考えに見合う形で間違わずに使いこなせたという承認を得ているということになり、闘争性の概念が当てはまると考えられる。

#### 6.4 まとめ

##### 6.4.1 無主性を高めることによる利用者自律性の向上

本章で得られた知見である「アナロジー志向の空間づくり」「さりげなく見られてしまうような視認性の確保」「制止判断基準の利用者への共有」は、いずれも利用者が自律的に拡張的な私的行為に及ぶことを促すマネジメントであると捉えられる。

利用者の私的行為を拡張するマネジメントは、利用者への行為のはたらきかけという視点で2つに分類できる。ひとつは管理者が存在感を示し当該公共空間における特定の利用者行為を直接的に明示し先導するマネジメント、ひとつは管理者は存在感を示さずに影をひそめ、利用者自らが私的行為を拡張することを支える無主性の高いマネジメントである。1.2において言及した各都市の事例はこの分類でいえば前者に該当するが、本章でその有効性を示したマネジメントは後者に該当する。本研究を通じて、無主性の高いマネジメントであっても利用者の私的行為を拡張しうるということが明らかになったと言える。

##### 6.4.2 闘争性の観点の有効性

本章で得られた知見は、どれも闘争性の観点をもって説明可能であった。私的行為が拡張的である場合、それ

はその場所で予め想定されていない行為であり、管理者によってお膳立てされた行為を実践することでは得られない満足を得ることができる。

また、無主性の高いマネジメントを実践する上で、利用者の闘争性が発揮されるよう考慮することにより利用者の自律性を更に高められる可能性が示唆されたと言える。

#### 6.4.3 他利用者との直接的相互作用への配慮の必要性

公共空間では、利用者は管理者だけでなく他利用者との間に直接的相互作用を配慮してマネジメントを実践することが重要である。

公共空間では利用者がどこでどのように各々の行為を実践するかが予め規定されず、利用者同士が互いの状況を鑑みて自らの位置や行為の程度を決め、その後も相互に意識しながら公共空間を利用している。また、他の利用者に自身の利用形態が受け入れられない場合には管理者に通報されてしまう事態が生じる。以上より、利用者同士は互いを管理者のように認識しており、利用者間で闘争的な直接的相互作用が生じやすいと考えられる。店舗空間に比べて不特定多数が様々な目的をもって自由に出入り・滞留できるという公共空間ならではの特性に起因している。

## 7. 研究の課題

### 7.1 管理者を対象とした調査

本研究では、管理者が実践している公共空間マネジメントとその効果としての当該公共空間の利用者による私的行為の拡張性を推し量るべく、拡張的な私的行為を実践している利用者の公共空間の認識から公共空間マネジメント実践のあり方を仮説として立案した。

因果性を含む仮説の立証のためには、本稿で得られた知見を活かし公共空間の利用状況や管理者を対象に含めた実態調査を重ねる必要がある。

### 7.2 管理者との相互作用が難しいケースの留意

本研究では、公共空間の利用者をプロバイダーに対する顧客と同等の受益者としての立場で取り扱ったが、公共空間特有の留意点が2点ある。1点目は利用者にとって自分の場所という観念が強い場合に管理者が不在化してしまう点、2点目は利用者が管理者の立場に深く入り込み、清掃など管理者的視座から公共空間を利用する点である。

これらの状況を前提とする場合には、管理者との直接的相互作用の視点に基づく公共空間マネジメントを講じることが難しい点に留意が必要である。

## 引用文献

平石貴士 (2022). パルクールの歴史と先行研究および宮城県富谷市における実践例. 立命館大学人文科学研究紀要, Vol. 130, 7-27.  
 一般社団法人日本パークール協会 (2018). 日本全国パークール調査 2017 結果報告書. [https://parkour.jp/wp-](https://parkour.jp/wp-content/uploads/2018/03/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%85%A8%E5%9B%BD%E3%83%91%E3%83%AB%E3%82%AF%E3%83%BC%E3%83%AB%E8%AA%BF%E6%9F%BB2017.pdf)

[content/uploads/2018/03/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%85%A8%E5%9B%BD%E3%83%91%E3%83%AB%E3%82%AF%E3%83%BC%E3%83%AB%E8%AA%BF%E6%9F%BB2017.pdf](https://parkour.jp/wp-content/uploads/2018/03/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%85%A8%E5%9B%BD%E3%83%91%E3%83%AB%E3%82%AF%E3%83%BC%E3%83%AB%E8%AA%BF%E6%9F%BB2017.pdf). (閲覧日: 2023 年 5 月 28 日)

伊藤孝紀・大矢知良・三宅航平 (2016). 都市再生推進法人によるエリアマネジメントの実態. 日本建築学会計画系論文集, Vol. 81, No. 730, 2701-2711.  
 キダー, J. (2022). パルクールと都市ートレイサーのエスノグラフィー. ミネルヴァ書房.  
 国土交通省 (2019). まちなかウォークアブル推進プログラム. <http://www.mlit.go.jp/common/001321053.pdf>. (閲覧日: 2023 年 1 月 25 日)  
 栗本光太郎 (2020). 「あそべるとよた」がマインドを変えた! 計画行政, Vol. 43, No. 4, 33-38.  
 三友奈々 (2013). プレイスメイキングから見た公共空間の滞留に関する考察. 芸術工学会誌, Vol. 62, 55-62.  
 三友奈々 (2015). プレイスメイキングの定義・原則と場の評価項目に関する考察 プロジェクトフォー・パブリックスペースによる原則と指針を通して. 日本デザイン学会 第 62 回研究発表大会, Vol. 62, 33.  
 三友奈々・渡和由 (2010). プレイスメイキングにおける「利用されるデザイン」に関する考察. 日本デザイン学会研究発表大会概要集, Vol. 57, H19-H19.  
 村松潤一 (2016). サービス概念の再考と新たなマーケティング論理. 社会情報研究, Vol. 15, 53-63.  
 野城智也・徳永哲・飯田智彦 (2022). 建築・まちづくりプロジェクトのマネジメント—持続可能な価値創造のために—. 東京大学出版会.  
 大藪亮 (2019). サービス視点のマーケティング研究—サービス・ドミナント・ロジックとサービス・ロジック—. 経営とデータサイエンス, Vol. 1, 1-18.  
 Project for Public Spaces (2022). Placemaking: What if we built our cities around places?  
 Project for Public Spaces (n.d.). What is placemaking? <https://www.pps.org/article/what-is-placemaking>. (閲覧日: 2023 年 1 月 26 日)  
 笹尾和宏・大庭哲治 (2022). 目撃者の意識からみた公共空間での特定利用形態に対する寛容性の探索的検討. 都市計画論文集, Vol. 57, No. 3, 895-901.  
 園田聡 (2019). プレイスメイキング—アクティビティ・ファーストの都市デザイン—. 学芸出版社.  
 杉田早苗・土井良浩 (2012). 地域組織による公共空間の管理運営に関する基礎的研究. 都市計画論文集, Vol. 47, No. 3, 469-474.  
 住田翔子 (2022). パルクールと都市文化—都市のみかたとつかいかた—. 立命館大学人文科学研究紀要, Vol. 130, 29-47.  
 Teder, M. E. (2019). Placemaking as co-creation: Professional roles and attitudes in practice. *CoDesign*, Vol. 15, No. 4, 289-307.  
 遠矢晃穂・嘉名光市・蕭閔偉 (2019). 公共空間における利用者アクティビティの通年変化に関する研究. 都市

計画論文集, Vol. 54, No. 3, 375-382.

U.S. General Services Administration and Project for Public Spaces (2007). *Achieving great federal public spaces a property manager's guide*.

山内裕 (2015). 「闘争」としてのサービス—顧客インタラクションの研究—. 中央経済社.

### Abstract

To increase the diversity of user activities in public spaces, the expandability of daily personal uses is important. This paper's purposes are to identify the theoretical issue of placemaking by checking placemaking against value co-creation theories in service research, and to prospect the way public space management ought to be to expand daily personal uses. By analyzing the theoretical system of placemaking and the perceptions of users of public space from the literature review, the two points have been clarified. First, It has not been confirmed that Service Logic is true of placemaking. This is found that the current theories of placemaking stand on Service-Dominant Logic, and there is no relation with Service Logic. Second, it can be contributive to the expandability of daily personal uses, even if the public space management never demonstrates to the users what they can do there directly and obviously. Both the idea of service as a struggle and attention to the direct interaction between users are helpful for such management.

(受稿 : 2023 年 4 月 3 日 受理 : 2023 年 6 月 10 日)